

道 徳

北 川 忠

1 道徳における「知識創造」とは

道徳における

知識創造とは

道徳教育の目標

*1 学習指導要領 「第3章道徳」の「第1目標」

道徳性

*2 「道徳性とは、人間として本来的な在り方やよりよい生き方を旨としてなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものである。それはまた、人間らしいよさであり、道徳的諸価値が一人一人の内面において統合されたものといえる。」

『小学校学習指導要領解説道徳編』平成11年 文部省（当時）

道徳性の発達

*3 「道徳性は、生まれたときから身に付いているものではない。人間は、道徳性の萌芽をもって生まれてくる。人間社会における様々な体験を通して学び、開花させ、固有のものを形成していくのである。」

『同上』

道徳的価値の更新

*4 ここでは、友情・勇気などについてそれぞれ個別のとらえ方を指す。

道徳における知識創造を次のように定義することにする。

「かかわり」を通して道徳的価値の深まりに気づき 道徳性を高めていこうとする営み

道徳教育の目標は、学校教育全体を通じて道徳的心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うことである。^{*1} 小学校では幼児期における道徳性^{*2}の芽生えを促す指導を踏まえて、人間としてよりよく生きるための方法を様々な体験や学習を通して学び、一人一人の基礎的な道徳性を確立していくことが必要である。また、道徳性は生まれたときから身に付いているものではないが、だれもがよりよく生きようとする心を持っている。^{*3} このような心が自分にもあることの気づきを促し、その心をもっと伸ばしていこうと意欲を喚起させることも、道徳性を育てるうえで大切なことである。

知識とは、経験や学習の中から認知されてきたものの総体である。人は自分の持つ知識を参考にして判断し行動している。この行動を促す知識を支えているものが道徳性である。個人の持つ道徳性は、生まれ育った環境において違いがあり、そこから人による様々な行動判断の差異も生じてくる。道徳教育の要として行われる道徳の時間では、自分や友だち、社会集団や自然などのかかわりを通じて、よりよく生きることをともに学ぶ。人は社会の中で、一人で生きていくことはできない。人と人がともに学ぶという「かかわり」によって、自分とは異なる感じ方や考え方と出会うことができる。この差異について互いに自分が持っていた道徳性をもとに「かかわり」あうことで、新たな気づきがそれまで自分が持っていた道徳的価値^{*4}にある時は新しいページとして付け加わり、ある時は一部分書き直されて全体が更新されていく。更新された道徳的価値は新たな道徳的心情の気づきを育てる手助けとなり、以前の道徳的価値に広がりや深まりが生じていることに気づくことができるのである。

2 道徳における「かかわり」の活性化とは

視点を変える

*5 「子どもが健全な発達段階を歩んでいくためには、自分だけでなく自分の周りの世界を理解することが必要である」『VLFによる思いやり育成プログラム』渡辺弥生編集 図書文化社

子ども一人一人が持つ価値観に対して、交流が起きる場面を重視する。ある事象に対するさまざまなとらえ方を出し合い、互いの価値観を比較することで、今まで持っていた道徳性が揺さぶられる状態である。子どもが自覚していなかった道徳的価値に対して、すそ野の広がりを感じさせるには、自分以外の視点に立って考える^{*5}という活動が有効な手段の一つである。「自分」「あなた」「その他の人」というように視点を変えて考えることで、今まで気づかなかったとらえ方があることに気づき、それまでの道徳的価値に広がりや深まりが生まれる。そして新たな気づきが加わることによって、子どもの内面に道徳的価値の自覚が深められていく。

3 「かかわり」を活性化するために

導入部の工夫

「かかわり」を活性化するプロセスを作り出すために、次に述べる手だてを行っていく。

(1) 資料選択 提示方法 導入の工夫をする

授業の初めに、教師が授業でねらう道徳的価値に関係した内容について、自分自身が体験した話をする。このとき、教師がどのように考えどう思ったか、も併せて伝える。教師の体験談を聞くことから、子どもは教師の視点を知る。そして、同じような体験をしたことがないかを問いかけ、そのときどう思ったかについても問いかける。友だちの話聞くことで友だちの視点を知ることができる。ここでは、授業でねらう道徳的価値について気持ちを向ける導入部の役割を果たすと共に授業に当たって子どもの心を柔らかくするねらいがある。また、子どもの体験を問い返すことで本授業以前に子どもが持っている道徳性を確認することもできる。

資料

*6 副読本や絵本、教師の自作による話を指す。ロールプレイングを取り入れた指導では、内容に葛藤する場面を取り入れた方が効果的である。

役割取得能力

*7 相手を思いやり、理解する能力のこと。対人間に生じた葛藤の解決や高いレベルの道徳的判断を行う前提になる。

ペア活動

*8 「ペアは、役割取得能力の発達段階が同じレベルで行動のタイプが違ふもの同士がよい。役割取得能力は、幼児期から青年期まで五段階ある。また、対人交渉方略(行動のタイプ)には、相手を変えようとするか、自分を変えようとするかの二種類がある。いずれもソーシャルスキルや観察によって判別される。」『Voices of Love and Freedom』(Selman, R.L) 1995
ただし、ここで判別される役割取得能力は、子どもの道徳性を評価するために用いるものではない。

ロールプレイング

*9 役割演技。役を演じ、他人を通して心の奥をのぞくことによって、意識していなかった自分の心を意識したり、役を演じ終ることによってカタルシスを感じたりできる。このときには、場面の設定や役を演じるのだという意識を明確にするなどに配慮する必要がある。『小学校新道徳授業の基本養護辞典』上杉賢士編著 明治図書

価値の自覚化

*10 「資料の中の人物に自分を重ねて、その人物の心情を通して自分の心情を深めたり、考え方を深めたりする場合は、価値の自覚をめざすことになる。価値の自覚をめざすのであれば、筋道をはっきりさせている構造化方式の方が、よりシャープな指導をすることができる。」『道徳授業の基本構造化理論』金井 肇 著 明治図書 1996

書く活動

道徳的実践力の

芽生え

続いて使用する資料*6の内容は、子どもの発達段階を考慮に入れて選択するが、子どもが身近に感じられる資料を選択・使用することで、資料の世界に引き込んでいくことができる。そのためには理解に時間がかからず、登場人物の心情がわかりやすい資料が適している。また、場面絵や視聴覚機器の使用などのさまざまな資料提示の工夫も大切である。

(2) ペア活動 グループ活動を効果的に用いて 差異に気づかせる

「かかわり」を活性化させるには、異なった考え方(役割取得能力*7)を持つ子どもをペアやグループにすると効果的*8である。ねらいとする道徳的価値に迫る部分では、構成的グループエンカウンターによる手法やペアによるロールプレイング*9を用いることにより、挙手による発表だけでは引き出せない様々なことばかけの例や行動の例を子どもから引き出すことができる。役割を交代して行えば、子どもは、「自分」と「あなた」、「その他の人」の視点に立つことができる。引き出されたロールプレイングは、代表者に全員の前で演じさせる。また、自分たちの考えとは異なった例についても、代演させて比較させる。このロールプレイングを見ることで、子どもは第三者の視点に立って、比較しながら見るができる。

子どもは、自分を取り巻く「ひと・もの・こと」と体を通してかかわることによって、さまざまなことを感じ取っている。この感じたことのあらわれが表現である。一人一人が対象とのかかわりによって感じることに、正邪はない。むしろ、既存の知識、概念にとらわれず、自然に集中することでより、素直に感じる事が得られるのである。

(3) 「かかわり」の有用性を自覚させ シェアリングにより定着をはかる

引き出された様々な考え方について、「なぜこのように言ったのか」「この言葉は、どういうことなのか」など発言の心情や意味について見つめ直させる。発言について「自分」「あなた」「その他の人」と視点を変えて観察しているので、言ったときの気持ちや言われた方の心情、また、外から見ていてどう思うかなどの評価が、発言の意味に対して理解を進めやすくする。

こうした発言について理解しようとする活動の過程においては、子どもの発達段階によって教師の支援が必要となる場合も考えられるが、子どもは自分の今までの考え方とは異なった考え方が存在することに気づき、これまでの自分の考え方と比較させていくことで、子ども自身が持っていた道徳的価値について、深まりや広がりが発生していることに気がつくことができる。表出される結果から見たとき、子どもの意見がよりよい方向へ広がることもあれば、意見に変化がない場合もあるだろう。しかし、自分の考え方以外のとらえ方を知ることによって道徳的価値についての深まりや広がりも発生しているのである。そして、多くの意見や考え方の中から自分が最も共感できると思う考え方はどれかを見つけ出し、選んだ理由についても発言させる。このような子ども同士のかかわりを通して、子どもの内面で道徳的価値の自覚化*10が深まっていくのである。

また、考え方に変化があったかどうかについて自分をふり返り、文章を書く、絵を描くという表現活動を通して、自分の心に内在化した思いを表現する。日記(自分の視点への気づき)、手紙(相手の視点への気づき)、物語の続きを書く(第三者の視点への気づき)など、子どもの実態や資料に応じて表現方法は様々である。学習を振り返り、自分自身を見つめ表現することによって更新され、広がり深められた道徳的価値はより強く心に記録されることだろう。また、自分の日常生活の様子や実態をフィードバックしながら振り返る活動も必要である。この記録は、自分のファイルに保存することで、子どもはいつでも見直すことができる。そして、学習した内容について学級通信や個別な連絡などで家庭とも連携をとることも含めて、家庭と共に子どもの道徳的実践力の芽生えを期待していきたい。

3 実践例 —3・4年複式

(1) 主題名 かがやけ、ぼくの命、あなたの命 3-(2)生命尊重 関連項目 4-(3)家族愛

(2) 本学習においてめざす知識創造

自分の命が 多くの人とつながっていることに気づき より大切にしていこうとすると共に
友だちの命に対しても大切にしようする態度を育てる

本学習でねらう道徳的価値は、生命尊重である。多くの子どもたちにとって、命は大事と言葉では分かっているが、命に対して畏敬の念を持つことは難しい。命は大切と言いつつも、自分の衝動で池や野原の生き物を取り、死んでしまえばゴミを捨てるように処分している子どもも多い。そこに命という認識は薄い。大切に思う家族はいつまでも自分と共にあり、大切な人がいなくなるなど考えたこともないであろう。

このような子どもたちが、自分の命がどのように生まれ、そのとき周りの人たちがどのように思っていたかを知る。そして命が親から受け継がれてきたことや、多くの人たちとつながっていることに気づく。その上で、現在の自分の命をさまざまな色を使って表現する。自分が表現した命について、理由を述べながらかわり合っていくことで、人によって多様なとらえ方があることを知り、どんな命も大切にされ、守られてきた命であるから自分の命と同じように、尊重していこうとする態度を育てていく。

(3) 「かかわり」を活性化するために

① 学習計画における「かかわり」の活性化

生まれたときの様子や、環境が異なるのだから命のとらえ方はさまざまである。人それぞれの命のとらえ方に正邪やまちがいはない。たとえ命のとらえ方が異なっているとしても命を大事にしたいという思いは変わることはない。ならば自分の命と同じようにどんな命も尊重されるべきである。友だちの考えと肯定的な態度でかかわるとき、自分の中に存在しなかった命のとらえ方が次々と入り込んでくる。このときが活性化である。

② 「かかわり」を活性化する手だて

(7) 資料選択、提示方法、導入の工夫をする

ねらいとする道徳的価値について明確にさせるために、命を中心としたウェビングを行い、学習の前段階で子どもがとらえている命のイメージを明らかにさせておく。また、子どもの実態に適した資料として「ドラえもん」から、のび太が生まれたときの様子についてかかれた資料を用いて、次に続く自分へのフィードバックにつながりやすくする。

(4) ペア活動、グループ活動を効果的に使用し、差異に気づかせる

子どもが、自分とは異なる友だちの考えを聞いてみたいと思ってこそ、「かかわり」は活性化される。そのために「かかわり」のグループ作りには、事前に調査した役割取得能力の、発達段階が異なる3人グループを基調として行うことで、様々なとらえ方や考え方が表出しやすくなるのである。構成的グループエンカウンター（以下エンカウンター）はねらいとする道徳的価値を明確にした上で、ねらいを達成するために用いることにより、自己肯定感を育て、子どもの人間関係を育てるために有効な手法である。その具体的手段の一つであるロールプレイングは、子どもの多様な考えをペアを使ったかかわりによって引き出し、発表させる手法である。共に相手の考えに対して肯定的態度を取りながら行う。子ども同士のロールプレイングは、子どもの素の言葉を引き出すことができる。これによって子どもは、「自分」の視点と「相手」の視点を知ることができ、代表者に再演または、代演してもらうことで、外側から見る視点「第三者」の視点も知ることができる。このような手だてを取ることで、子どもは自分との差異に気づきやすくなる。

(ウ) 「かかわり」の有用性を自覚させ、シェアリングにより、定着をはかる

「自分」だけの視点から考えていた初めの行動と、「相手」「第三者」の視点を経験した後では、自ずから考え方が変わってくることもあるであろう。また、「なぜ、そのように考えたのか」という理由を聞くことで、さらに新たな気づきが生まれやすくなっていく。考えが変わった子どもも、変わらなかった子どもも、とらえ方や考え方の広がりや深まりを知ることにより、自分が持っていた既知の道徳的価値に対してふり返ることができる。このような「かかわり」を通じて、子どもの道徳的価値の定着を図る方向へつなげていきたい。

(4) 学習計画 (総時数 4 時間)

主な活動と内容	「かかわり」を活性化する手だてと意図
<p>1 グループで「命につながるもの」をウェビングする</p> <p><命という言葉からつないでみよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おかあさん」と「おとうさん」かな ・「ひとつしかない」というのはどうかな ・「かがやく」というのもあるよ <p>2 「ぼくの生まれた日」を読んで考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親はのび太の生まれたことをとても喜んで いるんだな ・ぼくの親はどうだったのかな 聞いてみたいな 	<p>想起</p> <p>「誰から生まれるのか」に着目させることで、過去からの命のつながりに気づかせる、肯定的に聞き合うエンカウンターのルールを確認させることで、意見を言いやすくさせる。キーワード<命のつながり></p> <p>表出・共有</p> <p>代表に「のび太」「おとうさん」「おかあさん」の役割を交代して演じ、視点を変えて考えさせることで、のび太の親の気持ちに気づかせる。キーワード<子どもは宝物></p>
<p>3 生まれたばかりの頃の写真や手紙を見る</p> <p><自分の生まれたときのことを聞いてみよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・こんなにみんなが喜んでくれたんだ ・ぼくを産むときお母さんはとっても苦しかったんだな <p>4 ウェビングをふり返る</p> <p><つけたす言葉はありますか></p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっといい言葉があったよ ・新しい考えは色を変えてかこう 	<p>想起</p> <p>昔の写真や母親からの手紙を見せることで、自分が大切にされてきた経験を思い出させる。</p> <p>表出・共有</p> <p>手紙の感想を話し合うことで、さまざまな親の思いに気づかせ、親に感謝の気持ちを持とうとする。</p> <p>キーワード<ありがとう></p> <p>結合</p> <p>グループで再検討させることで、今までの命に対する考えに、新しいとらえ方を加え、広げていけるようにさせる。</p>
<p>5 自分が考える「自分の命」を色で表す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まず ぼくは元気いっぱいのような赤だな ・生き生きとした緑だな ・ぴかぴかして表しにくいな 字を入れてみようかな ・これだけじゃ足りないよ もっとつなぎたい 	<p>想起・表出</p> <p>表現方法にとまどいが生じる子どものため、教師が例を挙げて示す。各色がもつさまざまなイメージも確認させる。また表現技法に差が生じないようにハートの形を基本として、配色に工夫させる。色紙を用意して貼り付けることを基本とするが、形の加工や接ぎ貼り重ね貼りなどをして、考えをできるだけ具体的に表現できるようにさせる。</p>
<p>6 自分がイメージした「命」の表現を交流する</p> <p><理由を聞き合ってみよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・なるほど そういう考え方もあるね ・あの子とよく似ているけど 理由を聞くとちょっとちがうんだな ・あっちのグループの子にも聞いてみたいな 	<p>表出・共有・結合</p> <p>意見を言い易くさせるために、エンカウンターのルール（肯定的に聞く）を確認させる。交流したあとで、誰の命が印象に残ったかを話し合わせる。様々なとらえ方があることを知ることで、だれの命も祝福され、大切に守られてきた命であることを確認させ、自分も友だちも同じように大切であることに気づかせる。</p>

(5) 展開 (2/4)

〇めざす知識創造 ・自分の生まれたときの様子を知ること、自分の命をより大切にしていこうとする
意欲を育てる

主な活動と内容	時	「かかわり」を活性化する手だてと意図
<p>1 前時を振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ のび太が生まれたときは いろいろな人が喜んでいたな ・ 親にとって子どもは宝物と同じなんだ <p>2 写真や手紙を見る</p> <p><u>自分が生まれたときの様子はどうだったのだろう</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ぼくも みんなに喜んでもらっていたんだな ・ 生まれるまでずいぶんお母さんは苦しんだな ・ ぼくの命は 親からもらった命なんだ ・ ぼくも宝物なんだな <p>3 手紙の感想を聞く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ とてもうれしかった ・ 初めて知ったことがたくさんあった ・ もっとがんばらなきゃいけないと思った ・ お母さんありがとうって思った ・ そんなことがあったのか 知らなかったよ ・ 言い方は少しちがうけど 優しい気持ちは同じだな ・ ぼくとは 少しちがうところもあるんだな ・ なんとなく あの子のイメージがちがってきたな <p>6 ウェビングを振り返る</p> <p><新しいことばをつけたしてみよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ぼくは 「宝物」を付け加えたいな ・ 「よろこび」を付け足そうと思う ・ 永遠ということばもいいな <p>7 ワークシートに学習の感想を書く</p>	<p>1</p> <p>20</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>4</p>	<p><u>想起</u></p> <p>マンガのコマを拡大コピーして掲示することで、前時のポイントを思い出しやすいようにする。</p> <p><u>想起</u></p> <p>まず、担任の写真を映し出し、誰かを当てさせる。このときに、受容的視点に立って見ることを確認させる。次に、子ども3～6人を一枚に並べた写真を映し出す。写真は秘密裏に事前に集めておく。</p> <p><u>想起・表出</u></p> <p>前もって親に依頼しておいた子どもへの手紙を配り、静かに読ませる。読み終わった子には、今の気持ちを忘れないうちにワークシートに手紙の感想を書かせる。単にうれしかっただけに終わらせないように、母親の顔を思い出して、手紙の返事を書くつもりで書かせる。感想が書けた子から、発表させる。自分の書いた感想と比べながら聞くように支援する。</p> <p><u>共有</u></p> <p>手紙を読んだ感想を話させることで、自分との共通点や相違点に気づかせ、命に対する自己の認識を拡大させる。</p> <p><u>表出・共有・結合</u></p> <p>グループになり、命について新たに気づいたことばを前時に書き出した命のウェビングに書かせる。「かかわり」によって気づいた新しい言葉は、区別させるためカラーペンの色を変えて書き込むようにさせ、全体に発表させる。</p>
<p><u>ぼくは 親にとっても大切に育てられて守られていたんだな これからはいろいろなことにがんばっていききたいな</u></p>		

(6) 本学習における授業の実際と考察

「かかわり」を活性化するための三つの考え方に基づいて、この実践がめざす知識創造の充実をうながすことにつながったかについて考察していく。

① 資料選択・提示方法・導入の工夫について

第一次の段階で子どもから出された「命」にかかわるウェビングでは、「心臓」「内臓」「脳」など体の重要な部分を指す言葉や、「交通事故」「病気」など死にかかわる言葉が多くつながっていた。3年生4年生の子どもにとって、「命」は身近にとらえられることとして認識しておらず、子どもが「命」を表す言葉といえば、命をなくす原因として考えられる言葉のつながり程度にしか考えたことがないのである。A男（抽出児 1）は、自宅にたくさんの昆虫を飼育していて、今年もたくさんのカブトムシを誕生させている。年間を通して、カブトムシの「命」と直面しているはずであるが、彼からは、カブトムシにつながる言葉は出てこなかった。カブトムシに対して「命」を扱っているという認識があまりないのであろう。このような実態の子どもに本時の学習を効果的に進めるため、前時では、「ぼくの生まれた日」（4年生のどうとく ぶんけい）を取り上げた。ここではあたりまえのことではあるが、子どもが生まれるときには必ず親が存在していて、親は自分の子どもが生まれるときには、さまざまな期待を持ちながら、子どもを「宝物」と考えているのだということに気づかせた。しかし、それは資料に登場するのび太の話であって、自分はどのようなのだろうかと自分の家族をふりかえるとき、母親からいつも口やかましく言われていることを考えると、自分は本当に宝物だったのだろうか、と不安になってきた子どももいるようだ。

本学習において、主たる資料は親からの手紙である（写真1）。

手紙のことは子どもには知らせず、密かに保護者へ依頼して書いてもらった。この資料を十分に生かすために、導入として担任の子どもの時の写真を見せてから、子ども一人一人の赤ちゃんの時の写真をスクリーンに映し出した。この写真も保護者の協力で集めたものである。どの子どもも、生まれたばかりの頃はみんな小さくて思わず庇護せずにはいられない様子である。小さな命を視覚として確認することができた。続いて手渡された手紙には、子どもの不安感に答えるだけでなく、子ども自身にも今まで知らされていなかった出生時のできごとまでもが書かれていた。A児は、手紙を読み進めていくうちに笑顔は消え、真剣な表情から驚きの表情へと変化していき、「やばいよ、やばいよ」とつぶやき始めた。読後の感想を聞くと、「ぼくは、今、ここに生きていなかったかもしれない 何度も危ないことがあって、何回もの奇跡が重なって生きているということを初めて知った 生きていてよかった」と話している。また、B男は（抽出児 2）、「何度も流産し、もうだめだと言われたときにぼくが生まれた。もし、ぼくも流産だったら、今、生きていなかった」ととても驚いた表情で話している。また、本当は大切に思われていないのではないかと考えていたC児は、「私が生まれたときに、たくさんの人たちが駆けつけてくれたらしい こんなにたくさんの人たちによるこばれて生まれてきたことを、今まで知らなかった。うれしい」と話している。



写真1 親からの手紙を読む

子どもは写真を見たあと、手紙により自分の生まれたときの様子を知ることによって、今まであまり考えたことがなかった「自分の命」に具体性を持って近づいていくことができたのではないかと思う。一人一人の置かれた状況や様子は異なるが、それまであまり広がらなかった「命」に対してのとらえ方、考え方は確かにふくらんでいったに違いない。この活動によって「かかわり」による知識創造を充実させるための一人一人の基盤を固めることができたと思う。

② ペア活動、グループ活動を効果的に用いて、差異に気づかせる

役割取得能力を事前に調査して、組み合わせられた3人のグループで学習を行った。役割取得能力の異なった考え方をもつグループ作りは、「かかわり」の活性化のために有効な手段である。視点を変えたロールプレイングは前時の「ぼくの生まれた日」で行った。のび太の父親役、母親役、聞いているのび太役に分かれて、セリフを言うことで心情に迫った。(資料1)

本時では、前時のロールプレイング前に書き込んだウェビングに、新しく気づいた言葉を付け加える活動をグループ活動として設定した。(写真234)

父　ちゃんと名前は考えてあるんだ。
母　なんていうの。
父　〇〇っていうんだ。いい名だろ。
母　いい子に育ってほしいわ。
父　いい子に決まってるさ。

このように言われたのび太役の子に感想を聞く。
 父母役に、セリフを言ったときどんな気持ちにな
 ったかを聞く。

資料1 ロールプレイング

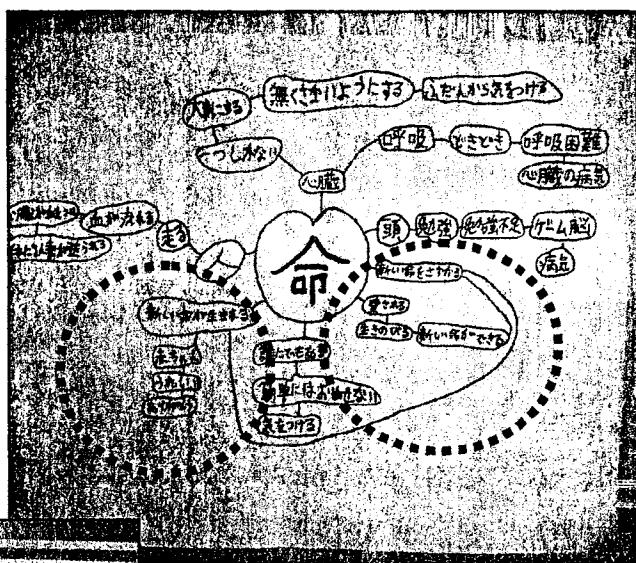


写真2 ウェビング1

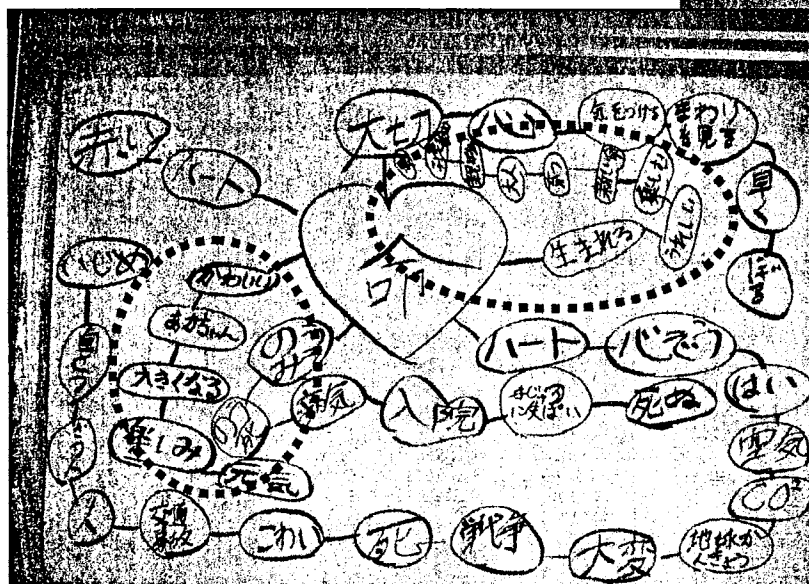
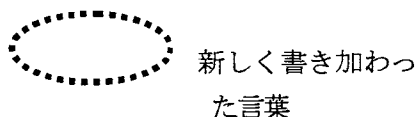


写真3 ウェビング2

新しい命の誕生を元にした学習を進めたため、グループ内で出される意見は同じ傾向が見られた。

意見の衝突のような「かかわり」はあまり見られなかったが、次々とつながっていく言葉を見ると 静かな「かかわり」といえるのではないかと思う。

B男たちのグループでは、前時に自分たちが書いたウェ
ビングをすべて書き直したいと言いだした。これは、それまでの自分たちがとらえていた「命」に対するとらえ
方を改めて、異なる感じ方、考え方をつかんだからであろう。(写真3のウェビング2)

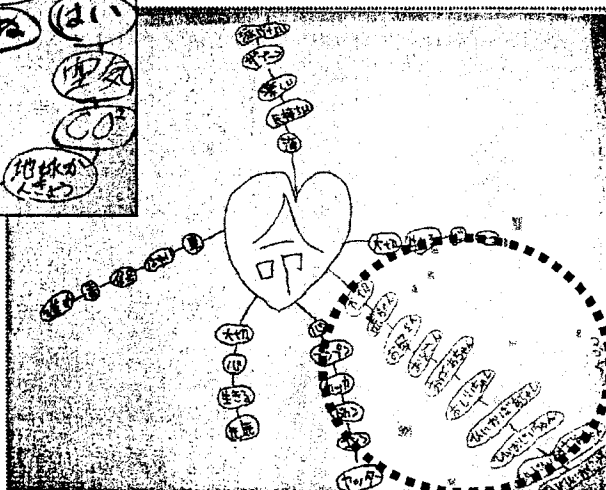


写真4 ウェビング3

③ 「かかわり」の有用性を自覚させ、シェアリングにより定着をはかる

新しくウェビングを書き終えたところで、ほかのグループに自分たちのウェビングを説明させた。子どもはなぜこの言葉を付け足したのかという説明を聞きながら、うなずいて聞いている場面が多く見られた。自分たちのグループでは考えつかなかった「命」につながる言葉が、ほかのグループとの「かかわり」によって納得できるイメージとして新しくつながっていったのである。そして、単に言葉としてだけではなく実感を伴って「命」ととらえ直し、改めて自分の命を大切にしようとしている。これは、学習のふりかえりから見取ることができる。(資料2)

(7) 成果と今後の課題

本時において「かかわり」を活性化するための手だてが有効であったかについて、外面的に見取することは難しく、積極的な「かかわり」の場面は少なかった。しかし学習計画の中で本時は、とても重要な時間である。自分の誕生の様子や生育の過程を知らせることは、「命」に対してあまり考えたことのない子どもに対して有効であり、親からの手紙により知識創造が促進されたことは、ウェビングやふりかえりから十分に確認できた。資料が効果的に働いたといえる。B児(資料2 C4参照)は攻撃的な行動が多く、何度もトラブルを起こしていたが、この学習以降ほとんど起きていない。この理由を尋ねると、「自分を制御しようとしている。我慢できるようになった。腹が立ったときに相手の気持ちを確かめようとしている。」と言っている。これは、年度当初から継続的に指導してきた成果とも考えられるが、自分が生まれたときの様子を初めて知ること

きっかけとして、今まで行ってきた自分本意で親に心配ばかりかけてきた行動を反省し、自分も親になるんだという気づきから自分以外の命に対して意識が働くようになったからではないかと考える。また、D児(資料2 C5参照)も同様に攻撃的な行動が多く見られ、保護者と話し合いを何度も行っていたが、この学習以降ほとんど以前のようなトラブルが見られなくなった。二人とも学校生活だけでなく、日常の学習活動でも相手の考えをまず聞こうという「かかわり」重視のスタンスに立てるようになってきた。ロールプレイングや親からの手紙を読ませることが、親の視点に立たせる手だてとして有効に働き、知識創造により道徳性が更新され、学習後の生活や学習態度に「かかわり」の変化が起きた例といえるだろう。

中学年の子どもに生命尊重を指導するには、まず自分の「命」が親から守られ、大事にされてきた事実や親の気持ちに気づかせることが大切である。子どもに今の自分の「命」は、自分の力で育んできたものではなく、ずっと親に守られ、育まれてきたのだと気づかせる。この気づきが親への感謝につながり、改めて自分の「命」を大切にしていこうという思いへとつながっていくのである。このような自分の「命」を大切にしようとする思いが無ければ、同様にほかの命も大切にしようという思いにはつながっていきにくい。今後も、自分の「命」も友だちの「命」も大切にできる心を育てるために、「かかわり」を重視した道徳教育、道徳学習を継続して行っていきたい。

- C1 命につながる言葉はたくさんあった。ほかのチームの言葉を聞いて、「あ、そういう言葉もあるんだな。」と思った。
- C2 命と言うこと自体、全然考えていなかったけど、今日考えて、考えて今まで考えつかなかったことがたくさん分かった。この勉強をして本当にうれしかった。
- C3 今、命を授かったような気がしました。なんか、うれしくなってきました。
- C4 ぼくの子はどんな子なのか楽しみだし、生まれたときにお母さんやお父さんと同じ気持ちになるんだろうと考えた。ぼくも赤ちゃんをかわいがって育てて、生まれてくれてうれしかった気持ちを伝えてあげたい。自分の命も親の命も自分の子どもの命も大切にしていきたい。
- C5 ぼくに親がいる。ぼくもいずれ親になる。ぼくはいつも母に逆らっていた。ぼくにとっては、ごくふつうのことだったが、母にとってはただごとではないくらいに頭にきているだろう。なんか、今までやってきたこと、すべてを無かったことにしたいくらいだ。
- C6 今までたんでいたぼくがバカだった。これからは心を入れ替えます。みんなぼくのために思って注意してくれるのに、ぼくがたんでいてどうするんだ。ぼくのためにみんなが手伝ってくれること、こんなすごいことをしてくれていることがぼくのエネルギーの元につながっていたのでたくましくなっていこうと思った。みんなで生きていくことでみんなから元気なことを取り入れているから、いつもがんばって生きようと思う。みんなありがとう。

資料2 ふりかえりより